

Program プログラム

ウォルトン
W. Walton

戴冠式行進曲「王冠」
Coronation March "Crown Imperial"

グリーグ
E. Grieg

ピアノ協奏曲 イ短調 作品16
Piano Concerto a-moll op.16

==== 休憩 Intermission ====

リムスキー=コルサコフ
N. Rimsky-Korsakov

交響組曲「シェエラザード」作品35
Symphonic Suite "Scheherazade" op.35

第1楽章	海とシンドバッドの船	The Sea and Sinbad's Ship
第2楽章	カランダール王子の物語	The Legend of the Kalendar Prince
第3楽章	若い王子と王女	The Young Prince and the Young Princess
第4楽章	バグダットの祭、海、船 は青銅の騎士のある岩で 難破、終曲	Festival at Baghdad. The Sea. Ship Breaks upon a Cliff Surmounted by Bronze Horseman.

曲目をめぐって

尾崎 正峰

W. ウォルトン (1902～83)

戴冠式行進曲「王冠」

《“アンファン・テリブル”の異名》

ウィリアム・ウォルトンは、日本での知名度は高くないかもしれませんが、本国イギリスでは、クラシックの領域で交響曲をはじめ多彩な作品を生み出すとともに、映画音楽まで幅広く手がける偉大な現代作曲家として親しまれています。

彼は、歌唱指導者であり教会のオルガニストであった父チャールズと歌手であった母ルイザ・マリアの次男としてランカシャー州オールダムに生まれました。音楽一家ゆえに子どもの頃からさまざまな音楽教育を受け、とくに歌唱面で秀でた才を示し、1912年、オックスフォードのキリスト教会大聖堂付属校 (Christ Church Cathedral School) に入学し聖歌隊で学ぶこととなります。学科長であったトーマス・ストロング (1861～1944) に才能を見出され、16才でオックスフォード大学へ進学します。進学後、ウォルトンは著名な音楽家、教育者であるヒュー・アレン卿 (1869～1946) から多くの示唆を得ながら、大学の図書館で当時の現代音楽であるストラヴィンスキー (1882～1971)、シベリウス (1865～1957)、ドビュッシー (1862～1918)

などの楽曲の研究に没頭しました。ところが、熱中の度が過ぎたため卒業に必要な音楽以外の学科の成績が芳しくなく、学位を取得できませんでした (Jesse Russell, Ronald Cohn, *William Walton*, Lennex Corp, 2012)。

先の見通しの立たない彼に救いの手をさしのべたのが大学時代の友人で詩人のサチュヴェレル・シットウェル (1897～1988) でした。ウォルトンをチェルシーの自宅に招き、作曲活動を続けられるよう支援しました。1920年以後 15年間を過ごすことになるシットウェル家はサチュヴェレルを含む 3 姉兄弟それぞれが優れた詩作家であるなど、芸術的環境に満ちた家庭でした。その恩恵は、名指揮者エルネスト・アンセルメ (1883～1969) などとともに学び、稀代の芸術プロデューサーであったセルゲイ・ディアギレフ (1872～1929) が主宰する「ロシアバレエ団 (Ballets Russes)」に関わり、ストラヴィンスキーやガーシュイン (1898～1937) と面会する機会を得るなどの形を取って現れました。

そして、シットウェル家の長姉であるエディス・シットウェル (1887～1964) による詩の付随音楽として作曲

された「ファサード (Façade)」(「建物の正面」「外観」の意味)は彼の出世作となります。1923年6月12日、ロンドンのエオリアン・ホールでの初演は、エディスのナンセンスな詩が装飾されたスクリーン越しにメガホンで朗読されるなどの奇想天外な仕掛けがあり、ウォルトンの音楽もアヴァンギャルドな、いわゆる「クラシック」とは大きく異なるものであったことから、スキャンダラスな作品として批判や拒絶などの反応が大半でしたが、その後、広く受け入れられるようになりました (Humphrey Burton & Maureen Murray, *William Walton; The Romantic Loner*, Oxford University Press, 2002)。

ウォルトンはほぼ独学で作曲技法を習得したこともあり、伝統、因習、慣習にとらわれず、革新的で自由な手法を用いた作品を生み出しました。ファサードの初演と同じ1923年、ザルツブルク音楽祭で演奏された実験的手法を盛り込んだ弦楽四重奏曲にアルバン・ベルク (1885~1935) が興味を示し、師であるシェーンベルク (1874~1951) との面会の機会を設けたというエピソードからも彼の音楽の特性をうかがうことができるでしょう。20代から30代にかけて作曲された、序曲「ポーツマス・ポイント」、協奏交響曲、ヴィオラ協奏曲、ヴァイオリン協奏曲、交響曲第1番、オラトリオ『ベルシャザールの饗宴』などの作品には先鋭的な特徴が際立っています (David Lloyd-Jones (ed.), *The*

William Walton Reader, Oxford University Press, 2018)。彼が、ジャン・コクトーの小説の題名「アンファン・テリブル (enfant terrible)」(「恐るべき子どもたち」という意味)になぞらえて称されるようになったのも、むべなるかなと思われまふ。

《その方ではないけれども・・・》

作曲家としての存在感が増す中、1937年5月12日に举行されたウエストminster寺院での戴冠式のために作曲されたのが「王冠」です。革新的な作風が目立った時期でしたが、有名なエルガー (1857~1934) の行進曲「威風堂々 (第1番)」を意識したともいわれ、伝統的な内容と構成の作品に仕上がっています——ちなみに、エルガーの作品の立派なたたずまいから、戴冠式、あるいは国王のための作品と知っている方もいらっしゃるかもしれませんが、リヴァプールのオーケストラ協会の演奏会で初演され、友人の指揮者と同協会に献呈されたものです——。

戴冠式で玉座に就いたのはジョージ6世 (1895~1952、在位1936~52) でしたが、作曲が依頼されたときに想定されていたのは別の国王でした。それはエドワード8世 (1894~1972)。いったい、どういうことでしょうか？

1936年1月、エドワード8世は国王に即位しますが、かねてよりウォリス・シンプソン (1896~1986) というアメリカ人女性との結婚を切望して

いました。しかし、さまざまな理由から王位に就いたままでは結婚できないということで、即位後1年も経たない同年12月11日、王位の放棄を宣言します。「王冠を賭けた恋」といわれる有名な事件であり、映画の題材となるなど各方面で取り上げられてきましたが、こちらのお話を続けるとあまりに長くなりそうなので、ひとつだけ、少し前に、かのマドンナが監督のメガホンを取った映画『ウォリスとエドワード——英国王冠をかけた恋』(2011)があります(かなり脚色されていますが)、ということだけで切り上げます。

国王になることなど夢にも思ったことがなかった弟のヨーク公アルバートは、兄に代わって王位を継承することが決まったとき耐えがたいほどの重圧を感じ、母であるメアリー王妃の前で涙にくれたとのこと。 “国王即位のプレッシャーと戴冠式”ということでは、吃音症に悩むジョージ6世の姿を描いて話題になった映画『英国王のスピーチ』(原題: The King's Speech)で、戴冠式で見事な宣誓をやり遂げるシーンが描かれたことが思い起こされます——ただし、実際に吃音症を克服したのはそれよりも10年程前であったなど、実際の史実と異なる部分も少なくありませんが、国王の人となりや時代の雰囲気を感じることができる作品といえます——。

第二次世界大戦中、国王一家はドイツ軍の空襲による生命の危険がありながらもロンドンにとどまり、国民と

同じく配給物資の制限という窮乏をともにしたことで、国民の支持を集め、揺らいでいた王室の権威を取り戻したとされています。

《戴冠式と日本とのつながり》

イギリス国王の戴冠式という日本とは関係ないだろうと思われることでしょう。解説子もそうでしたが、調べてみるといろいろありました。

戴冠式に参列した吉田雪子さんの手記は、彼女がウエストミンスター寺院にすべられた玉座のすぐ近くに指定された席に腰を下ろし、荘重なオルガンの響きとともに式が始まると「他の外国の王族の先頭に立って(昭和天皇の名代である=解説子注)秩父宮殿下と妃殿下が寺院の扉から入って」こられたこと、「妙なる音楽で一層引き立てられたその情景の美しさと厳粛な雰囲気ですっかり魅了され」たこと、「国王陛下の金色の衣装の目もくらむようなすばらしさに驚いて、私は夢想から現実に引き戻され」たことなど、イギリス王室と日本の皇室との関係の深さを示し、厳かで華やかな戴冠式の模様を伝えていきます(吉田雪子『ジョージ六世戴冠式と秩父宮』新人物往来社、1996)。王座の近くという上位の席に座ることができた彼女は、日本政治史で特筆される首相・吉田茂夫人。当時、吉田氏はイギリス大使として日英関係の改善に奔走する中、雪子夫人もイギリス各界との幅広い交友関係をもっていま

した。

また、奉祝のため各国の軍艦が勢揃いした5月20日の観艦式に日本からは重巡洋艦「足柄」が参加しました。足柄が帰属する日本海軍第4戦隊司令官であった小林宗之助は戴冠式にも出席しました。そのときの様子が当時の外交に関する文書記録に詳細に記されています——小林宗之助『英帝戴冠式及観艦式に参列して：附、新興獨逸と英國勢力の観測』日本外交協會、1937。この文書には、ヒトラーとの面会の情報をはじめとして、当時の緊迫した国際情勢、外交関係をしのばせる記載が多くあります。そのためでしょう、表紙に「㊦」のスタンプが大きく押されています。また、戴冠式を見るため地方から人々が集まってロンドンはいつもの倍の人口になっていたこと、ロンドンのバスのストライキがあったため混雑に拍車がかかったことまで書かれています。さすがイギリス、国の一大事業のさなかでもストライキをするんだと、妙に感心してしまいました（1935年まで、ラムゼイ・マクドナルド（1866～1937）を首相とする労働党政権でしたし）——。

「民間」レベルでは、朝日新聞社が戴冠式を祝うため東京ーロンドン間の親善飛行を企画しました。搭乗者として飯沼正明操縦士と塚越賢爾機関士の2人が選ばれ、1937年4月1日、羽田飛行場での出発式で「神風号」と命名され（時代ですね）、翌2日未明に立川飛行場を出発。そのときの模様

を伝える新聞記事のタイトルは「月明に銀翼颯爽・一路英京へ」（『朝日新聞』1937年4月2日東京版・朝刊）と勇ましいものでした。途中悪天候のため一度引き返し、4月6日に再度出発し、各国を経由しながら4月10日にロンドンに到着しました。非常に厳しい条件下のコースの飛行時間「94時間17分56秒」は当時の世界記録でした。偉業を成し遂げた二人を吉田大使夫妻は空港で出迎えますが、前述の雪子夫人は二人の「少しも飾り気のない態度」に好印象をもったようです。「神風号」の成功は日本の航空機技術の水準の高さを世界に知らしめ、イギリスの新聞『ロンドン・タイムズ』が偉業を称える社説を掲載したことをはじめとして各国の新聞が取り上げたこのことです（『朝日新聞』1937年5月12日東京版・朝刊）——深田祐介さんの『美貌なれ昭和——諏訪根自子と神風号の男たち』（文春文庫）は、このエピソードを一つの軸として書かれています——。

《王室の晴れの日の音楽へ》

「王冠」は、式の当日、エードリアン・ボールト卿（1889～1983）が指揮する特別編成の戴冠式記念オーケストラによって演奏されました——戴冠式の約1ヶ月前の4月16日、同じボールト卿指揮＝BBC交響楽団による録音が行われました。この録音はCDとして復刻され、戴冠式の際に響き渡ったであろう演奏をしのぶこと

ができます。また、戴冠式の3日前、BBC交響楽団の副指揮者であったクラレンス・レイボールド(1886~1972)の指揮による演奏がBBCによって全国放送されました(Michael Kennedy, Adrian Boult, Hamish Hamilton, 1987)——。発表直後から好意的に受けとめられた作品ですが、ジョージ6世の長女であるエリザベス女王の戴冠式(1953年6月2日)の際、ウォルトンによる新しい行進曲「宝玉と杖(Orb and Scepter)」とともに「王冠」も演奏されました。また、2011年4月のウィリアム王子とキャサリン妃の結婚の際にもこの曲が演奏されるなど、イギリス王室の晴れの日には欠かせない音楽となっているといえます。

初演後、何度か改訂がなされ、「初演版」から何か所かのカットが施されたウォルトン公認の「1963年版」が現在では主流となっているようです(今日の演奏も「1963年版」を使用)。ただ、ボールド卿は初演者としての誇

りからでしょうか、その後の幾度かの録音すべてが「初演版」によっています。一方、“原典主義者”ともいえる指揮者のロジャー・ノリントン(1934~)が録音で「1963年版」を用いているのは面白い現象です(オタク的感想ですが)。

戴冠式の厳かな雰囲気を感じさせる冒頭から、次第に盛り上がり、華やかな音の饗宴となります。中間部では国王の威厳ある歩みを示すかのようなメロディが奏でられます。ヴィオラやクラリネットなど中音域の楽器群が先導していくのも、ウォルトン、あるいはイギリスらしいといえます。打楽器の一撃とともに冒頭に戻り、メイン主題、そして、中間部のメロディがボリューム感をふくらませ、祝典の高揚感がいや増していきます。そして、最後にファンファーレ風のコーラルが金管楽器群によって奏でられ、おらかな荘厳さのうちに曲を閉じます。

(演奏時間：約7分)

E. グリーグ (1843~1907) ピアノ協奏曲 イ短調 作品16

《音楽史上の悪妻列伝》

音楽史上、いわゆる平穏な結婚生活を送った著名な作曲家というのはあまり見受けられません。音楽創造の才能の面はともあれ、気難しい、怒りっぽい、過敏といえるほど神経質などの穏やかならざる気質、はたまた、借金

や度重なる女性遍歴といった一般常識からすれば決して褒められたものではない行状、等々のエピソードは枚挙に暇がありませんので、ある意味“当然”と思わせます。他方、こうした作曲家本人(男性)の側の問題もありますが、対する妻(女性)の方はど

うなのかという場合、音楽史上での「三大悪妻」として、ハイドン、モーツァルト、チャイコフスキーの妻たちの名前がよく挙げられます。

解説子の私見では、ヨゼフ・ハイドン(1732～1809)の妻マリア・アンナ・アロイジア・アポロニア・ケラー(1729～1800)が他に抜きんできていると思います。夫ハイドンの才能をまったく理解しない彼女は、夫がせっかく書いた作品の楽譜を野菜に包むことに使ったりゴミとして出してしまうたりなどは日常茶飯事だったと伝えられています。これらの中には現在残されている作品以上の名作があったかもしれませんが。挙げ句の果てに「あなたが死んだ後に私が住む家を買って」と平然と頼んだという逸話も残されています。彼女はハイドンより先に亡くなりましたので思惑通りにはいきませんでした。……。

《相思相愛の幸福な結婚》

さて、突然「悪妻物語」から始まってしまいましたが、グリーグ夫妻を際立たせる長めの“枕”ということでご容赦ください。

生まれ故郷のノルウェーの都市ベルゲンで音楽家としての名声を得るようになったものの、さらなる成功のため、グリーグは1863年にデンマークのコペンハーゲンに活動の場を移します。この地で、後に妻となる従兄妹でソプラノ歌手のニーナ・ハーゲルupp(1845～1935)と出会います。し

かし、ニーナの両親、とくに、女優として舞台での名声を博したことのあつたニーナの母ウェルリグは、芸術家としての苦労や生活の不安定さを身をもって経験していたがゆえに二人の恋愛に大反対でした。こうした中、翌年の7月、二人は密かに婚約をしました。そして、1867年、結婚に踏み切ります。ニーナの実家ハーゲルupp家からは誰も結婚式に出席しませんでした。親しい友人だけの質素な内輪の宴でしたが、乾杯の際、列席していた人数が13人であることに気づいた友人の一人が(「13」という数を不吉と考えたのでしょう)、急いで家に帰り幼い自分の娘を連れてきて「これで半人増えた」と言ったというほほえましいエピソードが残されています(菅野浩和『グリーグ 生涯と作品』音楽之友社。以下、適宜、この名著を参照しました)。

ニーナは「思いやりの深い優しい性格」であつたと伝えられています。そのことは、1888年1月、ライプツィヒにいたグリーグ夫妻をチャイコフスキー(1849～93)が突然訪ねてきますが(その場には、かのブラームス(1833～97)も同席していました)、チャイコフスキーはニーナのことを「やさしそうな婦人。とてもすぐれた、完成された歌手。しかもこんなに教養の高い婦人を見たことはない」と賞賛したことにも示されています。

チャイコフスキーも認めるほどの歌手であつたニーナのためにグリー

グは歌曲を多く作曲しました。ときに「歌曲の年」ともいってよいほどの数の作品を生み出した年もあるほどです。始まりは、ニーナとの出会い、そして婚約という時期に作曲された、デンマークの作家アンデルセン（1805～75）の詩をもとにした《心の旋律集》作品5。その3曲目のタイトルは「きみを愛す」（『北欧の巨匠』音楽之友社、1994）。

これと同様に、「王冠」の項で名前を挙げたエルガーも、妻となるアリス（1848～1920）の実家から猛烈な反対を受けながらも踏み切った結婚にあたって、有名な作品「愛のあいさつ」を彼女に捧げていますが、アリスはエルガーにとって創作の源泉ともいえる存在であり、彼女も終生夫の創作活動を支えました。というわけで、相思相愛の実り多き幸福な結婚生活を送った作曲家としてグリーグとエルガーが両横綱といえるでしょう（どちらを「東」にするかはそれぞれのお好みで）。

《リストが認めた名品》

今日演奏しますピアノ協奏曲は、結婚の翌年の1868年、娘も授かった幸福を感じる中で作曲されました。この作品、そしてグリーグの名を世に広めるにあたって大きな力となったのが、当時、ヨーロッパを席捲していた大ピアニスト・作曲家のリスト（1811～86）でした。リストは若い音楽家を多く支援してきましたが、グリーグとの縁の

始まりはリストから投げかけられたものでした。それもまったくの偶然から。

1868年、ローマのとある楽譜屋でリストは知らない名前の作曲家の作品を見つけ、ざっと目を通したところ興味を持ち、購入して家に帰って弾いてみると北欧を感じさせる独特の内容に感じ入りました。その作品とはグリーグのヴァイオリン・ソナタ作品8。さっそく翌日にしたためたグリーグへの手紙には、作品への賞賛とともに「ドイツに来られるのならヴァイマルで会おう」との申し出が書き添えられていました。そして、グリーグの経済的基盤が芳しくないであろうことを察して、幾ばくかのお金を同封したとのことでした。

両者の最初の出会いは1870年2月のローマ。グリーグは新作のヴァイオリン・ソナタ第2番作品13などの自作を携えて面会に臨みました。作品の出来映えに満足したリストにグリーグがピアノの演奏を願い出ると、リストは自作の交響詩「タッソー」の一部を演奏しました。そのすばらしさに圧倒されたグリーグは、リストから再びソナタを演奏することを求められるも「最高のものを聴いてしまったので・・・」とためらっていると、リスト自らがヴァイオリンのパートまで含めて圧巻の演奏を披露しました。

およそ2ヶ月後、2度目の面会の際、グリーグは出版されたばかりのピアノ協奏曲の楽譜を持参しました。リス

トから演奏を促されましたが、前回、リストのピアノ演奏の凄さを思い知らされていたグリーグはこれを固辞しました。「それならば」ということでリストがピアノに向かい初見で演奏を始めました。グリーグが想定していたよりも速いテンポでしたが、完璧に、圧倒的な迫力で、音楽上の細かなニュアンスまで巧みにコントロールされていたそうです。そして第3楽章の終結部近くにさしかかったとき——具体的には、コーダに入る直前の416小節からのピアノの分散和音の部分——リストは椅子から飛び上がって「Gだ！GisではなくGだ！これが本当の北欧だ！」（ちなみに、Gとは「ソ」の音、Gisとは「ソのシャープ」の音のこと）と叫び、残りの部分を弾き終わりました。そして「これだ！これで通すのだ！君は本物を持っている！」と激賞しました。

《幾度も推敲の賜》

リストの助言を受け、早速オーケストレーションに手が入れましたが、その後、最晩年に至るまで幾度も改訂が施され、最終的に、ソロで100箇所、オーケストラの部分は300箇所を超える変更がなされたとされています。“Bergen Offentlige Bibliotek” というサイトで、リストとの会見の際に

持参したといわれる初稿のマニユスクリプト（自筆譜、つまり、グリーグ直筆の譜面）が公開されていてネットで見ることができます——日本に居ながらにして簡単に見られるのですから、ホント、すごい時代になったと思います——。どこがどのように変わったのか。そういうわけで数が多いので、一番分かりやすいと思われる最初の部分だけご紹介します。

現在の版は、冒頭1小節目はティンパニのソロで始まり、ロールのクレッシェンドの頂点に達した2小節目の頭の全オーケストラによるイ短調の和音とともにピアノ独奏が登場します。一方、初稿では、1小節目に、ティンパニの他に、ホルン2本、そして現在の版のオーケストラ編成にはないチューバの全音符のクレッシェンドがあり、弦楽器も冒頭からダイナミックスがp（ピアノ）のピッチカートを奏することになっています。そして2小節目はピアノ独奏のみとなっています。

生涯にわたって磨きをかけた、彼にとって唯一完成したピアノ協奏曲。リストならずとも聴くものを一気に北欧の世界へと誘（いざな）ってくれる名品です。ソリストの妙技とともに楽しみください。

（演奏時間：約30分）

第1楽章 Allegro molto moderato イ短調 4/4拍子 ソナタ形式

第2楽章 Adagio 変ニ長調 3/8拍子 複合三部形式

第3楽章 Allegro moderato molto e marcato イ短調 2/4拍子 ロンドソナタ形式

N. リムスキー＝コルサコフ (1844～1908) 交響組曲『シェエラザード』

《「素人」教授の一念発起》

リムスキー＝コルサコフは貴族の家柄に生まれ、ペテルブルグの海軍兵学校に入学し、その後、海軍士官として任官し海外赴任も経験しました。幼い頃から音楽に親しみ才能を示していましたが、1861年、「ロシア五人組」の主導的存在であったバラキレフ(1837～1910)に出会ったことで、作曲に本格的に取り組むようになりました。天賦の才があったのでしょうか、軍人としての任務の合間を縫いながら、早くも1865年には交響曲第1番を完成、初演も好評でした。続けて、2つの交響曲をまとめあげます。

1871年、彼はサンクト・ペテルブルグ音楽院の教授として迎えられます(軍籍を残したままでした)。交響曲を3つも書いているのだから至極当然と誰もが思いますね。しかし、当の本人は、若く「思い上がって」いたがゆえの「浅はかな」決断だったと回想しています。当時は「ディレッタント(好事家)で何も知らず」「対位法は生まれてこの方一度も書いたことがなかった」等々、自らの作曲技法の未熟さや知識の欠如を吐露しています。就任後、自らの才能と理論との溝を埋めるべく、室内楽作品の創作、ムソルグスキー(1839～81)の遺作の編集やボロディン(1833～87)の『イーゴリ公』の補筆改訂など、さまざまな

研鑽を積んだようです。また、ベルリオーズ(1803～69)の「幻想交響曲」などの標題付きの交響曲群やリストの交響詩などから多くを学んだとされています(フランシス・マース『ロシア音楽史』春秋社、2006)。しばらくの間、目立った作品は生まれず創作活動は止まったかのようにでしたが、再び花開くときがきました。現代でも頻繁に演奏される「スペイン奇想曲」、序曲「ロシアの復活祭」、そして、交響組曲『シェエラザード』を一気に完成させます。

『シェエラザード』は、1888年11月3日、作曲者自身の指揮、サンクトペテルブルクで開催されたロシア管弦楽演奏会で初演されました——この演奏会は、昨年のプログラムでも紹介した、当時のロシア音楽のパトロンの存在のミトロファーン・ベリャーエフ(1836～1904)が自前で1885年からスタートさせ、シリーズ化したものです——。

《『アラビアンナイト』の由来と受容》

リムスキー＝コルサコフにとって起死回生の作品である『シェエラザード』が『アラビアンナイト』を元に行っていることは広く知られていると思います。アラビア語の原題は『千一夜』。9世紀以降、口承、そして印刷技術が発達していなかったために手書きに

よる「写本」によって伝承されてきました。中東アラブ世界の文化遺産ともいえる存在ですが、1704年、アントワヌ・ガラン（1646～1715）がフランス語に翻訳しパリで出版したことがヨーロッパ世界に広まるきっかけでした。その後、イギリス、ドイツ、イタリア、オランダ、デンマークと各国語に基づく翻訳本が相次いで出版され、1763年にはロシア語の翻訳が発刊されます——「アラビアンナイト」という名称は、1706年、イギリスで出版された本のタイトルとしてつけられて以降広まったそうです——。その後もさまざまなアラビア語の版からあまた翻訳・編集され、児童文学、成人向け好色文学等々、多様な様相を呈しながらヨーロッパ社会を席捲し、広く受け入れられました（西尾哲夫『アラビアンナイト——文明のはざまに生まれた物語』岩波新書、2007）。

ただし、口承や写本によって伝えられてきたという事情から、最新の研究をもってしても、どれが「原本」として「本当」なのかは判断が困難なようです。また、ガランの翻訳には282夜分しかなかったことから、残りの700以上の話がどこかにあるのではないかとの憶測を呼ぶこととなります。そうした中「千一」という数に合わせるために出所の明らかでない物語まで入れ込んで仕立てた（現在話題の言葉で言えば「ねつ造」）怪しげな代物も出てきてしまいます。一方で、彼の地の言語で「千一」とは単純に「多

くの」という意味であって正確な数を表したのではないという解釈もあります（杉田英明『アラビアンナイトと日本人』岩波書店、2012）。

日本では、江戸時代の鎖国の時期でも、海外への唯一の「窓」であったオランダから伝わっていたようですが、まとまった形での翻訳は明治になってからでした。1875年、永峯秀樹（1848～1927）による『開卷驚奇（きょうき） 暴（あらび）夜（や）物語』が初のもので、続けて、1883年、井上勤（つとむ）（1850～1928）による『全世界一大奇書』が発刊されました——どちらの作品も「国立国会図書館デジタルコレクション」で見ることができます。繰り返しですが、すごい時代になったものです——。その後、さまざまな翻訳が著され、児童向けからセクシュアリティを強調したもので多彩に出回るようになったのはヨーロッパが辿ったのと同じ道といえます。明治以後、現在に至るまでの名だたる文学者たちも愛読し、自らの創作に生かしています（前掲『アラビアンナイトと日本人』）。

ところで、『アラビアンナイト』といえば「シンドバッド」「アリババ」「空飛ぶ絨毯」などを思い浮かべる方も多いことでしょう。しかし、最近の研究では、これらのお話しは『アラビアンナイト』とは別に成立したもので（とくに『シンドバット航海記』）、後代になって加えられたのではないかとされています。ちょっとびっくりですね。

《『シェエラザード』とオリエンタリズム》

『アラビアンナイト』から得たインスピレーションをもとに書き上げられた『シェエラザード』。そのあらすじは、妻の不貞を知ったシャーリアール王は、怒りとともに強い女性不信に陥り、若い女性と一夜をともにしては翌朝に殺してしまうと所業を続けます。国中から若い女性がいなくなっても王の怒りは鎮まりません。困り果てた大臣の娘シェエラザードが自ら名乗り出て王のもとへ向かいます。シェエラザードが語る物語の面白さに引き込まれ、次の話を聞きたいがために彼女の命を奪うことを一日一日と日延べをしていくうちに、王の怒りの心も鎮まり、シェエラザードを王妃とすることを決めます、といったものです。退廃的で官能的という特徴に綾取られ、いわゆる東方趣味といった意味でのオリエンタリズムが鮮明に現れているといえます(「オリエンタリズム」の用語については、アカデミックの領域で代表的な、サイド『オリエンタリズム』平凡社、1986、をご覧ください)。

当時のロシアの政治、社会に目を向ければ、西洋を男性の文化、合理的な理性の元にあるものとして、女性的で非合理的な東洋に優越することを自明視する——それがゆえに東洋の諸民族を支配することも正当化する——イデオロギーとしてのオリエンタリズムが、アレクサンドル 2 世 (1818～1881、ロシア皇帝在位 1855～1881)

の治世下において帝国の拡大路線を突き進むなかで拮がりを見せていました。その音楽的表現として、前述の『イーゴリ公』や『シェエラザード』のほかに、バラキレフがコーカサスの伝説を主題としたレールモントフ (1814～41) の詩『タマーラ』に基づいて作曲した交響詩『タマーラ』 (1882) などの作品が挙げられます。主人公の女王タマーラは溪谷沿いに建つ自らの塔に旅人を誘い込み官能的な一夜を過ごした後に殺して川に投げ込む、というように猟奇的な要素をもとった『タマーラ』。この作品から『シェエラザード』は影響を受けているとされます。物語の設定が類似していることのみならず、独奏ヴァイオリンによるシェエラザードの主題は『タマーラ』からの「剽窃に近い」とまで評されています(前掲『ロシア音楽史』)。

《管弦楽法の粋を尽くした音の絵巻》

『シェエラザード』は次の4つの特徴ある楽章から構成されています。近代管弦楽法の大家とまでいわれる境地に達したリムスキー＝コルサコフの手による豪華絢爛たる音の世界をお楽しみください。

第1楽章《海とシンドバッドの船》

冒頭、シャーリアール王の威厳ある主題が、王の怒りを表すかのように力強くユニゾンで奏されます。続けて、木管楽器群とホルンの柔らかな和音

に導かれ、優しく妖艶で繊細なシェエラザードの主題がヴァイオリン・ソロで奏でられます。そしてシンドバッドの物語が始まります。海の波のうねりを表す上下に動く 6/8 拍子の伴奏音型にのって、王の主題の変奏による海の主題が美しく展開し、シェエラザードの主題も絡み合いながらひとたびクライマックスを迎えます。いったん静まると、王、シェエラザード、そしてシンドバッド (の船) の主題が入れ替わり立ち替わり顔を出します。再びシンドバッドのお話しに戻ると、寄せては返す波のように音楽は千変万化の展開となり、最後に王のテーマが静かに奏されます。夜のとぼりがおりた頃に始まったシェエラザードの話に引き込まれているうちに暁近くになり、最初のお話しはここまで、とでも言いたげに。

第 2 楽章 《カランダール王子の物語》

冒頭のシェエラザードの主題とカデンツァに続けて、遊行僧に身をやつしたカランダール王子のどこかユーモラスな主題がファゴットによって自由に奏でられます。このメロディがオーボエ、弦楽器、木管群、そしてチェロとオーボエのソロに次々に引き継がれた後、突然、雰囲気が変わりトロンボーンが力強く鳴り響き、トランペットも加わります。弦楽器のピッチカートの伴奏でクラリネット・ソロによるアドリブ風のフレーズが終わると、メロディも伴奏も飛び跳ねるよう

なリズムあふれるものとなります。さまざまな楽器によるやり取りで盛り上がると、今度は、ファゴットがアドリブ風のフレーズを奏でた後、冒頭のメロディが賑やかに展開します。ひとたび落ち着くものの、徐々に楽器を加えながら勢いを増しつつ曲を閉じます。

第 3 楽章 《若い王子と王女》

美しいメロディをヴァイオリンがゆったりと歌います。チェロ、オーボエ、コール・アングレがこれに続きます。途中絡むクラリネットやフルートは、さわやかに吹き抜ける風を表しているかのようです。中間部では小太鼓のリズムに乗って、クラリネットが軽やかな舞曲風のメロディを奏し、さまざまな楽器で展開していきます。途中、シェエラザードの主題が挟まれますが、シェエラザード自身が物語の登場人物と一体化したかのように冒頭のメロディの一部を力強く謳い上げます。次第に穏やかになり、最後は軽やかなながらも静かに閉じられます。

第 4 楽章 《バグダッドの祭、海、船は青銅の騎士のある岩で難破、終曲》

王の主題がテンポ速く奏されます。どうもご機嫌がよろしくないようです。シェエラザードが気丈にもなだめたりすかしたり。そんなやりとりが 2 回交わされた後、主部となり、ヴィオラが刻むリズムに乗ってバグダッドの祭の主題をフルートが提示します。

ヴァイオリン族と木管楽器群との異なるリズム型が重ね合わさり賑やかさを増します。以後、前楽章までの各主題が随所で回想され、金管楽器群の華やかな響きに各種打楽器が加わり、どこまで盛り上がっていくのだろうかという思いにとらわれます。頂点に達したとき、突然、荒れ狂う海の場面に転換します。王の主題が朗々と歌われると同時に、木の葉のように荒波にもまれる船——弾いている、吹いている方も音符の渦に溺れそうです——。

そして、銅鑼の音が鳴り響き、船はついに難破したことを暗示します。ほどなくして海の主題が静かに提示されますが、嵐が過ぎ穏やかに波が引いた情景、そして王の怒りが鎮まった心理をふたつながらに描き出しています。王妃として迎えられたシェエラザードの主題、冒頭の木管楽器群とホルンによる和音が奏され、アラビアンナイトの、そして、王とシェエラザードをめぐるお話の幕を閉じます。めでたし、めでたし。 (演奏時間：約45分)

